基準IX　研究

観点IX－１・２－１

教員の研究活動を保障（時間的・財政的・環境的）しているか

点検IX－１・２－１－１

教員の研究活動を保障（時間的・財政的・環境的）している。

【観点に係る状況】

教員らの研究活動を掲載する紀要の発行は、1994 年に『大阪医科大学附属看護専門学校紀要（ISSN 1340-9859)』として創刊して以来毎年発行しており、全国の看護専門学校に送付している。校内のみならず、附属病院などからもさまざまな研究成果が投稿されている。また、大学医学部や他大学との共同研究に関する報告も収載している。

学会参加状況は、毎年度夏季に分散して参加している。参加者は学会で得た知見を出張報告にまとめる他、伝達会を開いてそれぞれの知見を発表し、それらを共有する努力をしている。講義や実習に支障を来たさない範囲での参加となるため、夏季休暇中が主たる学会参加期間となっている。

【分析結果とその根拠理由】

紀要は大学附属の専門学校という利点を生かして多方面からの投稿を得ることができるため、紀要の内容が充実するのみならず、教員の研究に対するモチベーションを活性化できるところに長所がある。また、ISSN に登録し、全国に配布しているため、別刷の請求もあり、投稿者の研究成果の発表に役立っている。問題点としては、年度によっては投稿数が少ない場合があるため、一定数以上の投稿を得られるシステムが必要である。また、教員の研究計画をもとに論文の投稿を分担する必要もある。学会への参加は、教員が新しい知見を獲得し、自己の資質向上の機会となるだけでなく、講義や実習に還元される部分が多い。問題としては情報を獲得することに偏りすぎ、情報発信する機会が少ないため、今後は分担して学会発表を行う。

紀要の発行状況

号数・発行年	ページ数	掲載論文数	その他
第 1 号・1994 年	57	5	6
第 2 号・1995 年	104	12	0
第 3 号・1996 年	99	14	1
第 4 号・1997 年	70	11	1
第 5 号・1998 年	68	9	0
第 6 号・1999 年	82	10	0
第 7 号・2000 年	74	8	0
第 8 号・2001 年	53	8	0
第 9 号・2002 年	73	8	0
第 10 号・2003 年	50	9	0
第 11 号・2004 年	61	7	0
第 12 号・2005 年	28	5	1

第 13 号・2006 年	56	10	0
第 14 号・2007 年	42	7	0
第 15 号・2008 年	54	9	0
第 16 号・2009 年	58	9	0
第 17 号・2010 年	54	9	0
第 18 号・2011 年	83	8	1

観点Ⅸ－１・２－１

教員の研究活動を助言・検討する体制が整っているか

点検Ⅸ－１・２－１－１

教員の研究活動を助言・検討する体制を整えている。

【観点に係る状況】

研究能力の向上のための支援として、研究時間を設け計画的に取り組めるような体制の整備や、書籍や機器の利用・購入に関して希望を確認している。研究活動の助言に関しては、大学関係部門へ指導を要請し、現状の看護学校紀要への掲載に止まることなく、研究の質向上を図り、研究実績の蓄積を目指している。

【分析結果とその根拠理由】

支援体制を整備したことにより、平成 19 年度教育学会に演題採用され発表に至っている。

平成 22 年度からは，研究指導への支援状況が薄くなっていたが、平成 23 年度は、教員の自己研鑽が実績を上げ、修士取得者 4 名と学士 1 名となり、平成 23 年度の教員数 8 名中に占める割合は大きい。その事は、同時に学生の研究への指導に反映され、平成 23 年度も引き続き、看護学生研究大会への投稿を果たしている。

観点Ⅸ－１・２－３

研究に価値をおき、研究活動を教員相互で支援し合う文化的素地が養成所にあるか

点検Ⅸ－１・２－３－１

研究に価値をおき、研究活動を教員相互で支援し合う文化的素地が養成所内にある。

【観点に係る状況】

研究に対する文化的素地はあり、支援する風土もあるが、日常業務の繁雑さを受け行動化されにくいのが現状であり、今後の課題とするところであった。平成 23 年度は学生数も最後の学年を残すのみとなり、従来からの学生指導の合間を活用して、地道に努力した結果、修士取得教員の研究への実績が上がっている。

【分析結果とその根拠理由】

同上

２．優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

研究発表の場である紀要が継続発行している点は評価できる。

【改善を要する点】

個人研究が多く、グループ研究を活性化する必要がある。教員の研究に求めるレベルが高すぎるため、研究発表に結びついていない。研究の在り方や意義に関する教員研修が必要である。

平成19年度においては、他の看護専門学校教員との共同研究を2題報告し、平成20年度はプロジェクトとして取り組んできた内容をまとめ投稿している。このように個人研究としての成果を上げながら、グループとしての研究への取り組みも同時に努力している。今後も、紀要など発表の場を活かしながら研究発表、論文投稿へと取り組む必要がある。平成22年度より本校は新入生の募集を停止し、同時に教員数は減少したが在校生へ対応をしている。日々の指導等、研究活動に費やす時間は十分に取れない状態ではあるが、勤務時間内での研究時間を保障するなど努力をしている。平成23年度は、研究実績を上げている。

３．基準Ⅸの自己評価の概要

教員個人の研究実績があがり、個人の研鑽も加味されて研究発表、修士取得と努力している。